

Y22b 国立天文台野辺山での地域連携事業 – 観光資源としての観測所 –

衣笠健三 (東大木曾観測所/国立天文台), 西村淳, 立松健一 (国立天文台)

国立天文台野辺山宇宙電波観測所は、1982年の開所以来、開かれた観測所として一般公開や特別公開など、継続的に公開事業を行ってきました。2010年代には、地域における星空観光のニーズが高まったこともあり、地元感謝デーのほか、信州佐久星空案内人、日本三選星名所といった地域と連携した事業を数多く展開しました。そして、2019年には、地元南牧村と国立天文台との間で、「野辺山宇宙電波観測所と南牧村の相互協力に関する協定」が締結されました。南牧村は、野辺山宇宙電波観測所を活用して、研究成果の普及と活用とともに、観光や教育のための事業を行うことができることとなりました。これまで無料での一般公開を継続してきましたが、それだけでなく、有料にて観光や教育等の事業を展開することになりました。その一つが観測所の案内の有料化です。以前は地元小中学生など限られた範囲に職員による案内を行ってきましたが、この有料化により一般の方々も観測所OBなどによる説明を聞きながら施設見学を行うことができるようになりました。さらには、観測所にある設備（シアター）を利用した学びの部屋ガイド、また、普段は入ることのできない観測所の夜の時間を利用したナイトツアー、アンテナと夜空を撮影する撮影イベントなど、数多くの有料事業を展開しています。

これらの事業は、野辺山宇宙電波観測所という40年以上継続する大型観測研究施設を観光資源として評価することになります。ナイトツアーのアンケートからは、90%以上の参加者から「満足した」との回答があり、さらに、80%以上の方から星や天文、観測所についての興味関心が高まったとの返答を得ました。さらに、参加者数や売上額などの面からも、観光資源としても価値は高いという結果が得られています。本講演では、2023年1月から2024年12月までに行った有料事業の内容とともに、アンケート結果から得られた内容について議論します。